

「相互理解への大きな一歩」

3-B 獨協大学 泉井芽唯

このレポートでは訪中を通して最も印象深かった訪問先と滞在を通して考えたことについて述べていく。

まず印象的だったのは、CVTE のハイテク企業見学だ。中国がここまでに高度な製品を生み出せる技術力に、素直に驚かされた。見学直後は、驚きと同時に「日本の技術でも同様の製品を作ることは可能ではないか」と思ったが、調べを進めるうちに、急速度で成長をするハイテク技術は、追いつくことすら困難であること、ましてや中国の実用化されている監視システムなどは蓄積された膨大なデータベースに対抗することは難しいことを知り、改めてその発展速度に驚くこととなった。さらに、中国の防犯・監視システムの性能の高さにも強い衝撃を受けた。たしかに街中をみても至る所に防犯カメラを見つけ、自分の行動に注意を払う気持ちになる。そういった意味で、膨大な人口を統制し秩序を保つために監視社会が機能していることを「監視される側」として体験することで、初めて実感することができた。

次に印象深かったのは、中国共産党歴史展示館だ。歴史の授業や映画を通して中国の歴史に触れてきたが、その理解は非常に大まかなものであった。展示館では短時間のツアーでありながらも現在の中国が成り立つまでの流れを細かな説明、貴重な資料を通して理解を深めることができたのは非常に貴重な体験となった。民主主義を取り入れている私たちは、社会主義や共産党に対してどこか否定的な印象を持つことが多い。しかし、中国の広大な土地と膨大で多様な人々をまとめるには共産党という強大な力を持った党でなければ難しいこと、そのような統治の在り方が中国には合っているのではないかと、歴史から教えられたように思う。

私は、大学で途上国支援に関する研究をしており、将来も開発援助に携わりたいと考えている。この途上国支援、特に東南アジア地域やアフリカといった地域において重要な役割を果たしているのが一帯一路構想を初めとした中国政府や中国企業の実存である。よく中国は、途上国を総称した呼び名であるグローバルサウスに含まれるかという議論がされるが、私が見た中国は、もはや途上国ではなく、先進国に十分対抗し得る、いわば新興国の先を行く存在だと感じた。これほどの技術力、経済力そして人材を中国が有している以上、途上国へ支援を行い、海外市場へ展開していくのは自然な流れであることに納得がいった。

もちろん、現在でも日本と中国の間には互いに偏見を抱いている人が少なくない。今回中国を訪問した私たちも、中国のごく一部分、しかも「招待された立場」として主に良い面を見てきたに過ぎず、これだけで中国を理解できたとは決して言えない。それでも、実際に現地へ行き、自分の目で見て考えたことは、中国への理解をするには十分で大きな第一歩となったことは間違いない。今回は自然災害も重なり予定していた通りに見学ができなかったからこともあり、「もう一度中国を見に行きたい」思うきっかけにもなった。こ

れからも相互理解に向けた姿勢を大切にし、自分の研究や仕事に生かしていきたい。
最後に、このような貴重な機会を与えてくださったこと、そして予定が変動するなかでも柔軟に対応をしてくださった日中友好協会の皆さん、中国政府の皆さんありがとうございました。

大切にしているものは何か

3-B 井上勇一

今回、初めて中国を訪れる機会に恵まれました。もともと、メディアを通じて近年の中国は科学技術の発展やその社会実装のスピードが非常に早い国だと知り、強い関心を抱いていました。大学生の頃から「現地でそれを自分の目で見てみたい」という思いがあり、中国語を学びながら留学制度を探し続けてきました。そして、試験や面接を経てようやく中国留学が決まったものの、COVID-19の影響により、残念ながらオンラインでの実施となってしまいました。そのような背景もあり、今回の訪中は、学生時代のやり残しを果たす貴重な機会となり、学生に戻ったかのような、わくわくする体験の連続でした。

日常の買い物では、電子決済の浸透ぶりに感心し、企業訪問では学校に導入された防犯システムや教育用モニターなど、生活に密着した先端技術の活用に強い印象を受けました。また、「紅樓夢」をモチーフにしたエンターテインメント施設では、音響設備やプロジェクトショウマッピングなどの最新技術と伝統文化、そして演者のパフォーマンスが見事に融合し、幻想的な世界観に圧倒されました。

北京外国語大学での学生交流も、非常に楽しく印象に残るものでした。現地の学生に図書館を案内してもらった際には、「この本、どれだけ暇でも読まないかも（笑）」と笑い合ったり、漫画の名シーンについて語り合ったり、おすすめのお菓子やお土産を紹介してもらったりと、会話していく中でたくさんの共通点を見つけることができました。別れた後もWeChatで連絡を取り合い、名残惜しさを感じるほどの関係を築けたことがとても嬉しく、心温まる経験でした。

訪中前の私は、偏見や不安を抱いていたわけではありませんが、実際に訪れたこともないのに、どこかで「異なる文化」として距離を置いて見ていた部分があったのかもしれませんが、しかし、実際に交流を重ねる中で、「あれが美味しかった」「あのドラマが面白かった」といった感覚的な共通体験を通じ、むしろ共感できる部分や価値観の一致の多さに気づかされました。

もちろん、文化の違いによる行き違いや誤解が生じることもあるという現実、報道などで目にすることがあります。しかし、そうした事実があるからこそ、今回の訪中を通じて改めて強く感じたのは、「相手が何を大切にしているのか」を理解しようとする姿勢の大切さでした。国や言語、文化が異なっても、相手の大事にしているものに耳を傾けようとするだけで、心が通い合う瞬間が生まれる可能性は大きく高まるのだと実感しました。また、プログラムの中で建築物や衣類、道具などの歴史的遺産を見学する機会があり、そうした取り組みの意義にも改めて気づかされました。衣食住をはじめとする文化の中心には常に「人」がいます。そうした遺産を通じて、その文化の中で暮らしてきた人々が何を美しいと感じ、何を大切にしてきたのかを、完全に理解することは難しくとも、確かな手がかりを得ることはできるはずです。今回の訪中を通して、今後芸術や文化財を見るときに視点も増えたように感じます。

我々は自分自身のことでも、「何を大切にしている、何に傷つくのか」をうまく説明できないことがあります。それは他者に対しても同じで、言葉だけで理解しようとしても見えてこない部分が多く存在します。だからこそ、遺産の見学などを通じて社会や文化を知ろうとし、直接的な交流を通じて相手の言葉や仕草、作るものや選ぶものの背景にある「大切にしているもの」を理解しようとする姿勢が大事だと感じ、この積み重ねによって良い関係が築けていければと思います。また日々の暮らしの中でもこの姿勢を大切にしたいと思いました。

今回の訪中にあたり、ご尽力くださったすべての関係者の皆様、そしてこのような貴重な機会を与えてくださった方々に、心より感謝申し上げます。

「今回の経験がどれだけ私の視野を広げてくれたのか」

3-B 慶應義塾大学 岩渕野々花

はじめに、この度は訪中団として中国を訪問させていただき、これまでの人生で最も印象深く刺激的な習慣を過ごすことができました。このようなかけがえのない経験をさせていただくにあたって関わってくださった全ての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。私が今回の訪中団への参加を決めたきっかけは、これまでの約1年半の大学での中国語学習でした。学生としても社会人としても中国に精通しておられる教授から、中国語それ自体の学習だけでなく、その根本にある文化的・社会的側面に関しても沢山教えていただけてきたことで、私も自分自身の人生における視野や興味関心が格段に広がってありました。海外経験やそれまでの予備知識がほかの団員より圧倒的に少なかった私は、新たに学び感銘を受けることが非常に多かったため、この文章では一週間の経験を順に振り返っていくことにします。

まず一日目は、トランジットの関係で移動メインの日でしたが、日中双方での空港散策や美味しい機内食を単純に楽しむことができました。空港から出るバスを降り始めて中国の空気を吸った時の衝撃は今でも忘れられません。二日目は雄安シンクには行けなかったものの、廊坊師範学校やシルクロード国際文化交流センターでは、その規模感や日本にはない演出や芸術のこだわりがたくさん感じられ、中国芸術への関心が大きく広がりました。ホテルでの太極拳やスーコンという楽器体験もとても物珍しく興味深かったです。三日目は午前中 CVTE の企業訪問がありましたが、中国の教育現場で使われているものは日本と似たものも多く、親近感を覚えました。午後は遺憾にも激しいバス酔いと腹痛が重なり、随行員様方のご配慮によりタクシーで一足先にホテルに戻ることにになってしまい、自身の脆弱さに呆れや動揺を隠せませんでしたが、現地の方々など多くの人の優しさにとっても救われ、以前に抱いていた中国の方の気性の荒さや衛生観念に関する偏見は大きく払拭されたと共に、自分自身への理解を深める一つの大きな出来事となりました。夕食から団に復帰でき、刀削麺のパフォーマンス見物や念願の円卓料理は心から楽しむことができ、団のほかの方々やご迷惑をおかけした皆様には感謝でいっぱいです。四日目は共産党歴史博物館を訪れ、日中関係の黒い側面を直視する機会となったとともに、今後の日中関係をも考えさせられる貴重な時間となりました。昼食でははじめて本場の北京ダックをいただくことができ、食文化の直接的な体験となりました。午後に訪れた宋慶齡基金会は、中国での幼少教育の側面を見学・体験でき、少し親近感を覚えました。五日目は楽しみにしていた北京外国語大学との交流がありましたが、流暢に日本語を話す中国人学生を見て、自身の今後の外国語学習や異文化理解への大きなモチベーションとなりました。六日目は、念願の北京大学で世界青年和平大会に参加してきました。初めてこのような世界規模の大きなイベントに日本代表として正式に招かれ、各国の様々な異色のパフォーマンスや対談を間近で見ることができ、異文化への関心が格段に高まりました。最終日は万里の長城に

行けなかったことは非常に悔しかったものの、晴天下で世界遺産の天壇公園に行くことができ、中国特有の寺院建築を直接見ることができとても良かったです。

まとめに、私は今回の貴重な経験を皮切りに、今後更に海外経験を積み、狭小な世界に縛られずより大きく新たな視野や考え方を身に着けていこうと決意しました。今ではまだこの経験が直接何にどのように生きるかは自分で説明しがたいところもありますが、この経験がなかったら得られなかったと胸を張って言えるような成長を今後もしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

「初めての中国訪問」

3-B 愛知県立大学 太田真緒

今回の訪中団への参加は、私にとって初めての中国訪問となりました。中国側からの温かい歓迎をはじめ、宿泊先のホテルや食事、訪問先など、どれも学びの多い充実した旅となりました。

特に印象的だったのは、シルクロード国際文化交流センターで鑑賞した『紅樓夢』の劇です。劇場までの道中には、物語の世界に没入できるような広大な広場や様々な場面を再現した展示が広がっており、開演前から十分に楽しむことができました。施設全体も非常に大規模で、すべてを見るには丸2日かかるほどの広さがあると伺いました。限られた時間しか見学できなかったのは残念でしたが、ぜひもう一度訪れたいと思わせてくれる場所でした。劇が始まってからも、舞台や待合室の装飾が非常に凝っており、どこを切り取っても物語の世界観に浸ることができました。中国語を学んでいる身として、登場人物やナレーターの言葉の中で理解できない部分が多かったことに悔しさも感じましたが、それ以上に『紅樓夢』への興味が深まり、帰国後は小説を自分で読み、物語への理解をより深めたいと思うようになりました。

また、今回の訪問では、中国語を大学で学んでいるということもあり、ガイドの方が席を外された際に、団員から通訳を頼まれる場面がありました。大学で学んできたことを活かすことができた喜びと同時に、即座に適切な語彙が思い浮かばない悔しさも感じ、自身の勉強不足を痛感しました。1週間同行してくださった中国人ガイドの方は、日本語が堪能なだけでなく、中国や日本の歴史、文化、風習にも非常に詳しく、私も中国語専攻の学生として、そのような幅広い知識を身につけたいという新たな学習目標を得ることができました。

この旅を通じて、中国という国をより身近に感じるようになりました。これまでは訪れたことのない国ということで、どこか距離感を抱いていましたが、実際に中国の地を踏み、人々と直接会話を交わし、ガイドの方の丁寧な説明を通して、多くのことを理解することができたと実感しています。

また、今回の訪問を通じて、中国と日本はお互いにとって非常に重要な存在であり、今後もその関係は続いていくと感じました。この訪中団の取り組みも、民間レベルでの両国の強い結びつきを示すものだと思います。バス移動中にはトヨタやレクサスの販売店を目にしたり、直接訪れることはできなかったものの、日本の企業名が記された建物を複数見かけたりするなど、経済面でも両国が深く関わり合っていることを実感しました。

このように、今回の中国訪問では、中国文化を肌で感じるとともに、もっと深く学びたいという意欲が生まれ、何よりも日中両国の深いつながりを実感することができた、非常に実り多い旅となりました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった公益社団法人日本中国友好協会の皆様、悪天候の中でも最後までスケジュール調整に尽力してくださった随行の皆様、途中体

調を崩した際に温かく寄り添ってくださった方々、そして1週間の旅を共に彩ってくださった団員の皆様に、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

「中国という国を捉えること」

3-B 東京外国語大学 大竹誠一

中国人の母を持ち、小学校低学年までの生活が中国中心だった私にとって、中国は故郷の一つであり悪い印象はそもそも持っていなかった。しかし、小さいころに教師や母親から教わり形成された中国観と、大学生として、日本人として改めて見る中国の在り方はきっと違うものだろうと考え、この度の訪中団に参加した。

まず驚いたのは、3日目に訪問した CVTE 視源股份で見た最新鋭の技術の数々だった。近年の日本ではモニターなどを活用した会議が一般的なものとして認知されてきたが、CVTE の AI を活用した会議・授業用モニターには驚嘆するばかりだった。それらしき図形を描くことで見やすくフロー化したり、自動文字起こしをしたり、立体図形の図示や展開図の作成など、「こうだったらいいな」というニーズに的確に応えていた。膨大な人口を抱える中国の教育現場だけあって、効率を重視していることが見て取れた。私も幼少期は中国で教育を受けたが、当時はまだ日本と同じように黒板とチョークが中心だったこともあり、たったの 10 年でここまでのイノベーションを成せることにはただただ感嘆するしかなかった。CVTE の取り組みは、単なる製品開発にとどまらず、学びの質と効率を同時に高めようとする強い意志の現れであり、日本の教育現場にも大きな示唆を与えてくれるものだった。

そして、4日目に訪問した中国共产党历史展览馆は今回で一番印象に残った施設だった。いくら中国への印象が良いものだろうと、やはり共産党というのはどこか親近感を抱きがたいもので、日本のメディアを見ても中国共産党は往々にして独裁や人権侵害、少数民族への弾圧などネガティブに描写されがちである。無論、そういった面も一党独裁である中国には確かに存在するが、果たしてそれだけで片付けてしまっているのだろうか。この博物館は、そんな中国共産党の困難に満ちた 100 年の歩みを私たちに教えてくれる。歴史の一瞬を切り取り実寸大の銅像や模型にしたもの、数々の写真に絵画、体験型アトラクションなど、様々な角度からその歴史に触れることができる。中国国内の人はもちろんのこと、外地からの訪問者にも共産党という党がどういふものなのかを感じてもらえるよう、非常に心血を注いで建てられた施設だということが身をもって感じられた。

6日目の世界青年和平大会は、大会名の通り「中国」というよりも「世界」について考えさせられるイベントだった。スローガンである一起为和平(ともに平和へ)から分かるように、このイベントに参加した数々の国の団体は平和への願いを胸にパフォーマンスを行った。大会冒頭では習近平総書記からのメッセージもあり、中国が今世界平和の構築を希求していること、まだ若く、しかし確固たる自我を持てる青年の力が必要であることを私はそのメッセージから感じ取った。大会は5時間にわたるもの

で長いように感じられるが、世界の人々の思いを一つ一つ受け止めていくと、その時間はあまりにも短く感じた。平和とはなんだろうか。平和のために、私たち青年は何をできるのだろうか。この問いに今すぐ答えを出すことはできないが、今回の大会を一つのきっかけとして今後も世界の平和について考えていきたい。

中国とはどのような国か。中華人民共和国の歴史自体はまだ100年に満たないが、数千年にわたる中国王朝で築き上げられた数々の文化は今も脈々と受け継がれている。技術面では中国製造2025や近年のイノベーションにより、世界最先端に至る分野も存在する。一方で、14億もの人口を抱える国家として程度の差こそあれど社会制度には確かに課題が残っており、今回見た「今の中国」というのもいわば中国の良い側面であり、ガイドさんの話やバスの車窓から見た景色からは確かな経済格差を感じた。この1週間で訪問できたのは河北省と北京市だけだったが、そのような都市部でさえ格差はハッキリと存在しているのだから、内陸側の省などとなれば格差はより広がっているだろう。中国の良い面だけ、悪い面だけを捉えるのではなく、その両方を合わせて考えることは非常に大切で、今住んでいる日本とも比較することでより多くの収穫を得られることだろう。何事も一点だけに着目するのではなく、広い視野を持つことが肝要であることを改めて思い知らされた1週間だった。

「訪中国で出会った生きた中国」

3号車 B 班 津田塾大学 緒方莉子

今回の訪中は、私にとって非常に貴重な体験となった。これまでの人生の中で、私は中国という国について漠然としたイメージを持っていた。ニュースや教科書、インターネット記事、さらには日常会話の中で耳にする言葉によって、無意識のうちに「中国はこういう国だ」という先入観を抱いていたと思う。しかし、実際に現地を訪れ、自分の目で見て、耳で聞き、人と話すことで、そのような思い込みがいかに不完全で、時に偏ったものであったかを痛感した。訪中の中でまず強く感じたのは、「中国は本当に広い国だ」ということだった。これは単に地理的な意味だけではない。都市の規模、交通インフラの整備の度合い、人の多さ、そして文化や価値観の多様性。あらゆる側面において、そのスケールの大きさに圧倒された。特に印象的だったのは、先端技術の発展ぶりだった。AI 技術やデジタル化の進展は想像以上で、スマートシティのような仕組みも現実のものとして広く取り入れられていた。それらの様子を目の当たりにして、技術の進歩とその社会実装のスピードに驚かされたと同時に、日本も学ぶべき点が多くあると感じた。

また、中国の歴史の深さにも触れる機会があった。壮大な歴史的建造物や、長い時間をかけて築かれてきた文化的伝統は、ただ観光名所として存在するのではなく、今を生きる人々の中に息づいていた。それは、日本とも共通するところでありながら、やはり異なる「時間の重なり方」を持っているように感じられた。過去を大切にしながらも、未来に向かって確かな歩みを続けている。そのバランスの取り方に、私は深い感銘を受けた。

こうした体験を通して得られた最大の収穫は、「自分の目で見て、確かめることの大切さ」だった。どんなに情報があふれている時代であっても、実際に現地に足を運び、空気を感じ、人と触れ合うことでしか得られないものがある。今回の訪中で感じた「生きた中国」は、どんな記事や映像よりもずっとリアルで、複雑で、そして魅力的だった。

しかし一方で、今回の訪中には課題や物足りなさもあった。それは、「中国の良い面にしか触れることができなかった」という点である。訪問先や交流の機会が、どうしても発展的でポジティブな内容に集中していたため、現代中国が抱える課題や問題点については、ほとんど知ることができなかった。たとえば、都市と農村の間に存在する教育格差について、現地の学生と率直な意見交換ができれば、より現実に近い理解が得られたのではないかと思う。また、中国における英語教育の実情についても、興味深いテーマでありながら深く踏み込むことができなかったことは残念だった。さらに、今回の訪問では、抗日戦争や南京大虐殺といった歴史的に重要なテーマに関する言及や説明が一切なかった。これは日中両国の関係において避けて通れない歴史であり、今後の相互理解を深めていく上で非常に重要な視点であるはずだ。もちろん、敏感な問題であるからこそ簡単に取り扱えるものではないが、だからこそ、学生同士の対話の中でこそ、率直に向き合える機会が必要なのではないかと感じた。

今回の訪中を通して、私は中国に対する新たな視点を得たと同時に、自分自身の情報の受け取り方、そして他国との向き合い方についても考えさせられた。一面的な理解ではなく、多角的で柔軟な視点を持つこと。目の前の現実に対して、正面から向き合う勇気を持つこと。そして、文化や考え方の違いを、恐れずに知ろうとする姿勢を忘れないこと。これらのことを、私は今回の訪中体験から強く学んだ。今後も、今回の経験を原点として、自分の世界を少しずつ広げていきたい。そして、単なる「訪問者」としての視点にとどまらず、「隣人」としてどう関わっていくべきか、自分なりに考え続けていきたいと思う。

歴史的背景と向き合い、相互理解を繋ぐ訪中団

3B 立正大学 小野寺風花

私にとって今回の訪中は人生初めての中国訪問であり、期待や不安、好奇心等、沢山の想いを抱えて参加した。不可抗力のトラブルや自らの体調不良により、柔軟な対応力や精神力が求められる状況下であったが、そのような状況であったからこそ私は多くの学びや経験をする事ができた。1週間、バスの車窓からは町中の警察の多さや交通事情の違いなど、実際に行ってみなければ気づかないような文化的、日常の雰囲気の違いを感じることができた。食事、ホテル、施設見学等、五感で中国という国を吸収できた。

今回の訪中国で私がいちばん記憶に残っているのは、北京大学での世界青年平和大会と共産党博物館である。世界青年平和大会では、日中だけでなくアジア以外の国の青年や代表が多く出席しており、中国の枠を超えて様々な国のパフォーマンスや文化に触れる事ができ、この1週間の中でも特別なイベントであった。各国のスピーチや青年らの平和に対する会議の様子を聞いて、平和に対する想いや世界の繋がり的重要性を感じる事ができた。このような大会に、私が日本人青年代表として出席できた事は大変光栄であり、帰国後もこの大会の事を伝え続けていきたいと強く考えた。次に、共産党博物館で私が感じた事についてである。私は、この博物館で戦争をどう捉えているかと中国発展について中国側の目線から学ぶ事ができた。日本の教科書では、日本と中国が関係している戦争を、日本の目線でしか知る事ができなかった。しかし、教科書とは違う、相手国目線の事実を学ぶことは私たち日本人にとってとても重要な事であり、両国の歴史を見つめ直すためには避けては通れないと強く感じる事ができた。博物館では歴史上の日本軍の酷い行いについて書かれている場面も多く、中国でいわゆる「反日」と言われる方々が存在する事実も、私たちは受け入れないとならないし、反日である方々の事を否定してはならないと思った。しかし、中国の国民全てがそうかと言われると、全くそんな事は無い。今回は北京と河北省に行く事ができ、その短い1週間の中でも中国国民の温かさや、我々に親切にしてくれる人と沢山出会う事ができた。この経験から、日中の過去と今を知る必要はあるが、必要以上に恐れったり避けたりする必要は無いと、本当に身をもって学ぶ事ができ、歴史・政治的印象と国民の感情を一緒にしてはならないと強く思った。

最後になりましたが、今回の訪中団に関わってくださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。私自身、広東地域の訪問を大変楽しみにしており、天候不良やその他事情により訪問が叶わない事態となった事をとても残念に感じていた。しかし、出発前及び行程中随行スタッフや関係者の皆様の迅速かつ柔軟なご対応により、代わりに師範学校や共産党博物館など見学する事ができ、最後まで意義深い訪中を終えることができた。また、私が行程3日目にバス酔いで体調を崩してしまい、随行員や関係者の方々にご迷惑をおかけしてしまった事を心からお詫び申し上げます。そして、タクシーの手配や軽食を用意していただいたこと、途中から合流できるよう手配していただいた事など、皆様のご尽力に本当に深く感謝いたします。今回行けなかった地域があるからこそ、次は自分の力で広東、重慶、

上海などの都市を回り、この目で必ず見に行くと決心がついた。私の中で、この訪中団を次の一步に繋げる事ができ、これからも将来の日中交流の架け橋になれるよう努力していく所存である。

「広さ」を知る旅：中国訪問を通じて得たもの

3-B 熊本大学 木村一心

私は、2025 年大学生訪中団第 2 陣団員として、7 月 24 日から 30 日の 1 週間、河北省と北京を訪れた。本稿では、私にとって初めてとなる訪中体験について、その報告と感想を記したい。

まず、今回の訪中事業で私に最初の驚きをもたらしたのは何か——それは、没入型ステージでの『紅樓夢』の鑑賞でも、広く新しい空港でも、ハイテク企業の最新技術でもない。訪中前、中国へ行くことを報告した友人たちの反応である。彼らは、「本場の麻婆豆腐、僕も食べたいなあ」、「中国に帰ったパンダたちに会えるかも?」「世界遺産に行けるなんて羨ましいなあ」といった言葉を発し、訪中を反対する声や安全面・衛生面を疑う声があるだろうと身構えていた私は、意表をつかれたのである。何かと心配性な高齢の祖母までも、私の参加をととても喜んでいたら後から母づてに聞いた（反対を受けることを恐れ、祖母には訪中前に自ら報告をしなかった）。

さらに、私は中国に足を踏み入れる前から、温かい歓迎を受けたと記憶している。大学で同じ授業を受けていた中国人の留学生にも、同じように訪中を報告したところ、中国の食べ物、歴史、名所などについてわざわざ 20 ページ弱にまで及ぶ資料を作り、紹介してくれたのである。そこには、「中国語は私が教えてあげます」、「北京ダックは思いのほか油があるので、ゆっくり食べてください」、「現地でアプリの使い方に困ったら私に連絡してください」などなど…心温まる言葉がたくさんあった。当時その友人とはそこまで親しくなかったものの、今回の訪中を決めなければ、ここまで中国の方の心に触れる経験はなかったかもしれないと思うと、大学生訪中団として中国を訪れることが決まった時から、すでに私の貴重な経験は始まっていたといえるだろう。

さて、意外にもあっけなく友人たちに送り出され、中国人の友人の温かい心に触れながら降り立った中国では、企業訪問、共産党歴史展覧館でのガイドさんのご説明、現地大学生との交流、世界青年平和大会など、日常生活や普段の旅行では成すことのできない貴重な経験の連続であった。巨大な建築物、大きな絵、広い道路と植え込み、食文化の豊富さなど、中国の「広さ」をさまざまな視点で体感すると同時に、少々大げさかもしれないが、その「広さ」を認識することが、平和ないし友好の基なのかもしれないと感じた。違う文化の中で、慣習の中で、価値観の中で生まれ育ってきた人間やその集まりが、すべてを理解し、飲み込むことなどできないのは当然のことである。重要なのは、前に飲み込めなかったものと姿かたちの似たものと対峙した時、その背景にある「広さ」を想像し、慮ることではないか。私たちが体験した中国料理のように、苦く見えても甘いものもある。辛く見えて、そうでもないこともある。先入観だけで判断して本当の味を知らないまま過ごしていくことは、とてももったいなく、怖くもあるだろう。

私たちは経験を重ね、長く生きていく中で、ついラベル分けをして物事を処理してしまいくようになる。私自身、これからどんな経験をするのかわからないが、80 歳、100 歳になっ

ても、歯がなくなっても、何でも口に入れてみる、そんな柔軟さと好奇心を持ち続けるお
ばあちゃんになりたいものだ。

最後になったが、今回の訪中事業に尽力してくださった日本と中国双方の関係者の皆様、
送り出してくれた友人や家族に、心から感謝の意を申し上げる。

「価値観が広がる初めての中国」

3-B 西南学院大学 隈裕子

北京発羽田行きの帰りの機内から、少しずつ小さくなってゆく北京を眺めながら、初めての中国の旅を振り返る。つい1週間前、広州行きの機内から、ゆるく蛇行する茶色く濁った川を見た時はこれが教科書で学んだ中国の川だ、と実際に目にできて喜んでいて。けれど、中国の伝統や歴史から最新技術まで様々な側面に触れる密度の濃い1週間を過ごし、その魅力を知った今となっては、それが自身の中で再び目にしたい風景に変わっていることに気づく。

訪中前、中国行きが決まったことを周囲に報告すると、世代によっては不安や懸念も耳にした。しかし、そこで不思議に思ったのは彼らが「中国に行ったことがない」にも拘らず、そうした心象を抱いている、といった点だった。実際に中国に留学していた人々からはそうしたことは聞かず、人々の温かさや先進技術の差について聞かされた。ここにギャップを感じ取り、この柔軟な時期に自分の目で見てみる必要があると思い、今回の訪中団に参加した。

まず訪中してすぐに、積み重ねた歴史の重みが島国日本と違うということに随所で圧倒された。例えば、2日目に訪れた廊坊師範学院では、古代建築についての展示解説を受けたが、当時における先進性を感じ、その装飾性や建築方法にも驚かされた。寺院建築など日本人の目には見慣れたものも多かったが、日本にいと当たり前で分らなくなる「日本文化の源流である中国文化」を中国の観点から捉えられたのは貴重な経験となった。宿泊先のホテルでも太極拳や伝統楽器の体験があったが、これも中国が培ってきた伝統のほんの一部に過ぎないのだと思うと、その文化の豊穡さにただただ感服するばかりだった。

そして自身の価値観が揺さぶられ、幅が広がったと感じたのは4日目に訪れた中国共産党歴史展覧館だろう。まず床一面が真っ赤なロビーに案内された。女性の職員も赤一色の制服に身を包んでおり、随所に党の趣向が見て取れた。館内にも、中国各地から選ばれたという職員の方々の案内にも常に緊張した雰囲気漂っており、中国における共産党の存在について考えるきっかけになった。戦後自由民主主義の価値観の中で育ってきた者にとって、共産主義は対極に位置するような価値観であり、これまで理解するのが難しいと感じていた。しかし、中国を訪れて数日経ったところで中国の文脈で展示を見てみると、この広大な国土と人民をどのように統治するのか、それにはどういった手法が効果的なのか、という観点から中国と共産党に対する見え方が変わってくるのを感じた。国土の大きさや特徴、国としての歴史も異なる国家において、そうしたやり方も存在するということが受け入れられるようになったのだ。こうした価値観のしなやかな変化にこそ、今回の訪中の意味があると思う。一度その立場に立って考えることが他者を知るためにいかに大切なことかを実感できたのだ。さらに、日本の教科書に載っていることだけがすべてではないこと、実際に自分の目と心で感じるということがどれほど重要なのかも改めて感じた。自分が生まれるずっと前の、しかし自分という一人の人間に繋がっている歴史の前に実際に

立つことがどれほど心震えることで、どれほどの価値を持つかは、体験してみないと得られない感覚ではないだろうか。

また、この1週間はバス移動が基本ではあったが、ガイドさんの話や車窓からも多くの学びを得ることが出来た。北京の街中に溢れるバイクは電動で、ガスを排出していない。至る所に並べてある青・黄・緑3色のシェアサイクルは、何十社も淘汰された後、現在の3社のみになったそうだ。決まったスペースに駐輪しないと鍵もかからないようになっている。そうした技術の掛け合わせで街のすべてが成り立っているかと思えば、道路清掃は特大の竹箒を乗せた専用の1人乗り車両が街中をあちこち巡回しており、清掃担当の方々が一生懸命落ち葉を掻き集めていた。北京は最新技術のイメージが先行していたため、人力が活躍していることに新鮮な驚きを感じつつも、その組み合わせが堪らなく魅力的に感じられた。

地元の人々と接する機会は少なかったが、車窓から彼らの生活の一部を垣間見て「中国人」という括りではなく、一人一人の物語があることを知り、日本に来ている留学生や華僑の人々の捉え方もより解像度が上がったように感じる。地理的な距離は変わらないが、今回訪中団に参加したことで中国との心理的距離はぐっと近くなった。

最後に、日本全国から集まった団員との交流は刺激的で、普段は知り合えないような専攻の学生たちと様々な話題について語り合う機会を得られたのは大変貴重だった。初めての中国を訪中団の一員として訪れることができたことに心から感謝したい。

中国を目で見て、心で感じ、多くの人に伝えたいこと

3-B 北見工業大学 後藤 裕弥

私が中国に赴く前に見聞きした印象深いニュースは、広東省にて日本人学校登校中の男児が刺殺された事件です。それ以外にも蘇州バス襲撃事件や訪中団帰国後翌日の蘇州日本人親子襲撃事件など、日本にいただけでは中国は反日感情に溢れた危ない国という印象を受けやすい環境で私たちは生活しています。このような事件は、満州事変の発端となった柳条湖事件が起きた日（満州事変記念日）に近く、そういった政治パフォーマンスが頻繁に中国国内で行われ、この時期は反日感情が高まるから気をつけるよう日本外務省から注意喚起されている現状もあります。私たちはその中でも中国人民抗日戦争勝利 80 周年という記念の年に現地に向かいました。従来はファウウェイ訪問による中国のハイテックの理解が大きな目的でしたが、天災による旅程変更で中国共産党歴史展示館を見学する機会を得ました。常に多くの警備員に守られながら、現地の観光客に紛れて一通りのガイドを受けました。入場し初めて目に入る展示は、中国近代史における外国（特に日本）の侵略と、それに抵抗した歴史でした（以下展示文和訳：1894 年 7 月、日本は意図的に朝鮮と中国への侵略である甲午戦争を引き起こした。北洋艦隊は全滅し、日本軍は遼東半島の旅順と威海衛を占領した。日本軍は旅順を占領した後、4 日間にわたり約 2 万人の中国住民を虐殺した。写真は、日本軍が旅順で中国住民を虐殺した後、住民に死体の埋葬を強制している様子。）。ガイドの方は日本に関する歴史や天安門事件についてほぼ触れませんでした。興味関心を惹くものを自由に散策した私たちは中国に来ないと分からない中国共産党指導下での日本への歴史観や自国への誇りを目で見て心で感じることができました。

中国は日本に対する負の歴史が根深い一方、日本を重要な立ち位置と見ている姿も今回の訪中で理解しました。外交官の揺籠と呼ばれる北京外国語大学への訪問では、全言語中五位以内に入る規模の学生が日本語を学んでいました。また、習近平国家主席が書簡を送り 130 カ国以上の国・地域から 3000 人ほど参加した世界青年友好交流大会では、私たちを含め 200 人ほどの日本の青年が招待されました。これらから中国の政治的・経済的側面において日本が重要視されていることを目の当たりにしました。

今回随行した佐々木団長が頻繁におっしゃった、日本は過去に中国の民間人を虐殺した事実を認め、受け入れなければいけないという本意を目で見て心で感じた一方、スーパーでの買い物や北京外国語大学の学生との交流等中国の日常では、私たちが中国人ではないと理解しながらも笑顔で押し売りをされたり、ちいかわやポケモン等日本発祥のキャラクターに好感を持ったりと人種を差別しないおおらかな中国の現地の姿も感じることができました。また、美团を始めとする配車・デリバリー・シェアサイクル等中国版 Uber Eats + Booking.com + Lime と言えるサービスは、近年の中国の IT 革命を大きく表しており、中国の IT 化は監視社会の強化という側面だけでなく人々の生活の豊かさにも大きく貢献していることを実感しました。

インターネットやメディアの報道だけでは捉えきれない、現地の人々の姿や価値観、生活のリアルを自分の五感で体感したこの7日間は、中国社会の現在を体感し理解を深める良いきっかけとなりました。訪中団で得られた経験を一過性のものにせず、大学の国際交流イベントやSNSを活用し周囲へ発信していきたいと強く感じています。特に以前の私のようにまだ中国に一步も踏み出せずにいる同世代の若者に向けて、「政治的対立と市民の感情は安易に一緒くたにしてはならない。正しく理解し恐れると同時に、国や文化が違って人も人は理解し合える」というメッセージを届けたいです。

最後に、今回の訪中団の方々、随員スタッフの皆様、ご尽力いただいた全ての皆様、今回の訪中団において不可抗力な天災による大幅な旅程等の変更に見舞われながら、最後までスケジュール調整にご尽力いただきありがとうございました。皆様のサポートのおかげで大変貴重な経験を得ることができました。以下の漢詩に代えて感謝の意を申し上げます。

雲開萬里赴東風，逆旅艱難志未窮。
安排有序調三策，涉路雖險見九重。
志當三位融為一，目與身心合始通。
惟期心印同天地，省志方成大道功。

多角の視野で第三者への架け橋に

3-B 龍谷大学 阪田千尋

私たちは事前研修の際に『自身の目で見て、心で感じ、帰国後に多くの人々に伝える』というスローガンを設定しました。このスローガンへたどり着くまでにたくさんの意見交換を行いました。私を含めるたいの参加者は中国に対してネガティブな印象を持っているにも関わらず実際に中国へ訪問したことがある参加者はほぼいない状態でした。この状況下に違和感を抱き上記のスローガンを課題として今回の訪問へ挑みました。

そして中国へ訪問した簡潔な感想はずばり『文化に寄り添う』です。そんなこと当たり前のことであり訪問する以前から明らかであると感じるでしょう。しかし案外難しいことであり、適応することはさらに難易度が増すと実感したのです。具体的には順番についてです。日本では電車に乗るとき、コンビニでお会計をするとき、エレベーターに乗るときなど様々な場面で順番を強く重視します。一方、中国では順番を日本ほど重視する文化はなくどちらかといえば協調より個々が強い印象を受けました。実際に私が友人とコンビニのお会計を並んでいた際、いつの間にか数人のお会計が終わっており衝撃を受けました。その時私は「中国人は順番を守らない」という思考が瞬時に思い浮かびました。その後、友人とこの出来事について会話をしていた時に私たちは冷静になって考えると中国と日本では文化が異なるためすべてにおいて否定するのではなく文化に寄り添わなければいけないという結論に至りました。ここが最も重要なポイントであると私は確信しています。単なるネガティブな印象という言葉で縛り付けるのではなく、実際に体験して感じた違いを受け止め、文化に適応する必要性は中国のみならずどの国でも大切なことです。いつもとは異なる角度から物事を考えるという気づきは私にとって最大の収穫であったと言えるでしょう。

また中国人でまとめ上げた人々ではなく、一人一人の中国の方の印象としてとても友好的でありメディアで取り上げられるものとはかなり異なったものでした。確かに私たちは日中友好協会の団員として訪問をしていることから日本に対して親しみを抱く中国の一部の方としか関わる機会がなかったのですべての人々がそうであると言い切ることはできません。しかし、たとえ一部の方々であったとしても友好心を持ち中国の文化を精一杯伝えようとしてくださる姿は私が以前に抱いていた中国観とは異なり、もう少し柔らかな印象へと導いてくれました。帰国後、メディアでは新たに子ども連れの日本人女性が中国で暴行を受けたというニュースが取り上げられていました。以前の私であればやはり中国は反日心が強く、治安が良くないのであろうと思うだけだったでしょう。一方、今回の訪問を経て自身の五感を使い経験を得た現状の私はメディアに取り上げられているものを中国全体のものへと印象を広げるのではなく、多角度からの見極めを試みることができました。

結果として、訪問前後で中国に対する印象がネガティブからポジティブへ大幅に変わるということは一週間の中では困難でありましたが多角の視野を養う第一歩になったのでは

ないかと思います。その多角の視野を実際の経験をもとに今後とも養い、第三者へと繋げられる人になることをここに明記します。

「目で見て、聞いて、感じる」から始まる中国理解
—体験を通して揺らいだイメージと広がる学びへの欲求—
法政大学国際文化学部 4 年 佐竹遥香

今回の中国訪問は、私にとって「国際」という言葉の本質を考えるきっかけとなる、非常に濃密で貴重な時間となりました。わずか一週間という期間でしたが、現地で目にした風景、耳にした言葉、人々との交流を通して、それまで自分の中にあった「中国」のイメージが揺らぎ、再構築される過程を実感しました。

訪問前の私は、「中国＝共産主義国家」「中国＝反日感情が強い国」「中国＝経済成長はしているけれど格差が大きい」といった漠然とした印象を持っていました。それらの印象の多くは、報道や教科書、周囲の人々の会話など、間接的な情報から形成されたものであり、どこか一面的で抽象的なものであったと思います。しかし、実際に現地に足を運び、自分の目で見、耳で聞き、体で感じることで、それらの先入観が大きく揺さぶられました。たとえば、IT 企業の訪問では、AI やタッチパネル技術などが教育現場や生活空間に実装されている様子を見て、日本よりも実用面での技術応用が進んでいることに驚きを覚えました。宋慶齡基金会の子ども向け科学館でも、VR や AR 技術がふんだんに使われており、未来志向の教育の在り方を肌で感じました。一方で、道には電動バイクや自輪車が無秩序に走り、人々が自由に行き交う様子もあり、技術の進化と生活の混沌が同時に存在していることが印象的でした。

また、人々の温かさに触れたことも、大きな気づきのひとつでした。現地で出会った方々——同行の方、店員さん、大学生、案内人の皆さん——は、言葉の壁がある中でも親切で、優しく接してくださいました。中国語が完璧に話せるわけではない私に対しても、笑顔を見せ、丁寧に教えてくれる人々の姿から、これまでの「中国人は無愛想」といったイメージが大きく覆されました。国境や政治的背景を超えた「人と人」のつながりが、こんなにも温かく、心地よいものだということに、胸を打たれました。

歴史・文化の側面でも深い学びがありました。紅樓夢ミュージアムを訪れた際には、中国の古典文学の豊かさと、それが現代の人々の中にも生きていることを感じました。八卦掌の体験では、伝統文化がいまも暮らしの中に息づいていることを知りました。中国共産党の歴史展示では、日本の教育で触れる歴史像とは全く異なる視点から語られる戦争や社会主義の成果にふれ、「歴史とは、語る立場によってその意味が大きく変わるものなのだ」と深く考えさせられました。

こうした経験を通じて、「日本から見た中国」「中国から見た外国」「他国から見た中国」といった異なる視点の存在を強く意識するようになりました。一つの国を知るには、単なる外側からの観察ではなく、複数の視点を持ってその国を捉える必要があります。そして、その視点の獲得には、「自ら体験すること」「相手の立場に立って考えること」「知識を深めること」が不可欠であると実感しました。

今回の訪問で新たに生まれた関心もあります。たとえば、中国の外交政策と国際的な立ち位置、経済発展とその持続可能性、そして広がる貧富の格差など、短期間では理解しきれない大きなテーマに対して、もっと学びを深めたいという思いが芽生えました。また、世界青年交流大会では、各国の若者が戦争と平和について真剣に語り合う姿に触れ、平和のために何ができるのかという問いが、自分ごととして立ち上がってきました。

今後は、こうした問いを追究するためにも、中国語の運用能力をさらに高め、言語を通じてより深く現地社会に関わることができるようになりたいと考えています。そして、いつか再び中国を訪れ、今回感じたことを原点に、新たな学びを重ねていきたいと思います。中国訪問を通して得たものは、単なる知識や経験にとどまりませんでした。私にとってそれは、「他者と世界を見る目」を育むきっかけであり、学び続けることの意味を改めて実感させてくれる、大切な一歩となりました。この経験を胸に、これからの学びと人生において、より広い視野と深い理解を持って歩んでいきたいと思っています。

最後に、今回の訪問で出会った現地の方々をはじめ、随員の先生方やスタッフの皆さまの温かいご支援に心から感謝申し上げます。この貴重な経験を、今後の学びと行動へと確実に結びつけていきたいと考えています。

自分の目で見た中国を通して伝えたいこと

3号車B班 桜美林大学 田村寿々音

私は大学で中国語を専攻しており、日頃から中国人の先生方や留学生、事務局の方々と関わる機会が多くある。そのため中国に対しては人よりもポジティブな印象を持っていた。しかし今回、訪中団に参加することを周囲に伝えたとき、思っていた以上に「どうして中国に行くの?」といった反応や、人によっては「危なくないのか、大丈夫なのか?」といった反応を受け、驚きと同時にショックを受けた。中国に対してネガティブなイメージを抱いている人が、想像以上に多いという現実と直面したのだ。中国語を大学で勉強しており、素敵な中国人の先生や留学生の友人に恵まれている私にとって、その事実が悲しいと感じた。だからこそ、私は今回の訪中を、自分の目で本当の中国を見て感じる機会にしたいと強く思っていた。そして実際に現地で過ごした数日間は、その期待を大きく超える経験となった。

現地に到着してまず驚いたのは、到着した空港のハイテクさ、そしてその広さだった。また中国ではすでにデジタル化が社会全体に浸透しており、日常生活のあらゆる場面でQRコード決済や顔認証などが使われている。空港の段階でその先進性を感じ、企業や博物館等の訪問を通じて、日本との技術格差を目の当たりにした。中国の最先端の技術を目の当たりにし、日本は中国に追いつく必要があるのではないかと強く感じた。

北京市内に入ると、歴史と現代が融合した都市の姿が広がっていた。高層ビルが立ち並んでいるかと思えば、中国を感じられるような外観の建物などもあり、古さと新しさが調和して共存していた。こうした景色を見る中で、中国という国の奥深さ、そして多面的な魅力を実感した。

訪中期間、中でも特に印象的だったのが、北京外国語大学の学生たちとの交流である。彼らは非常に流暢な日本語を話し、日本や日本文化に対しても深い興味関心を持っていた。最初は緊張していたが、こちらが拙い中国語で話すと、ゆっくり話してくれたり、私の未完成な中国語を理解しようとしてくれたりした。学習者同士だからこそ通じ合える部分があり、会話を通して互いの文化や価値観を理解しようとする姿勢に、私は深く感動した。こうした交流を通じて、自分の中国語が「教室の中だけのもの」ではなく、実際に人と心を通わせるための「生きた言葉」なのだと実感できた。この体験は、机に向かって勉強しているだけでは得られない、本当に貴重な学びだった。

そして29日に参加した「世界青年和平大会」では、中国に留まらず、名の通り「世界」の平和にフォーカスを当てて、世界の平和を願って各国からやってきた人々のパフォーマンスを見ることができた。私はそのどれもに感動した。いつかのタイミングで耳にした「世界平和を若者に託す」という言葉が私の中で印象に残っている。私たちのような若者に世界平和を託してくれているのなら、それに応えられるような人材になりたいと漠然と感じた。私のような微弱な大学生でも何ができるのか、それを考えるきっかけにもなり、このような大会に参加する機会を頂けて感謝しかない。また私はそこでせっかくなら他国の人

とも話してみたいと思い、会場にいたイラク、パキスタン、ミャンマーからやって来ていた人々に勇気を出して話しかけ、一緒に写真を撮ってもらった。正直私の拙い英語では、上手く伝えたいことを伝えられない場面も多くあったが、伝えたい気持ちと身振り手振り、表情、パッション、いくつかのキーワードでコミュニケーションを取ることができた。これらは私にとって自信に繋がる貴重な経験となった。

また、訪中団で共に行動した日本人の仲間たちとの繋がりも、私にとって大きな財産となった。皆それぞれの大学で、それぞれの分野を学んでおり、本来ならば出会うことのなかったはずの人々とこの訪中団を通して巡り合うことができた。活動の合間にお互いのことを話したり、一緒に笑い合ったり、時には自分の将来についての相談に乗ってもらったりもした。今でも連絡を取り合い、関係が続けている友人ができたことは、私の人生における宝物である。

私はもともと中国への留学を考えていたが、費用面の問題などから一度は断念したため、せめて大学在学中に中国へ行きたいと思い、今回の訪中団に参加を決めた。しかし今回の訪中団での体験を通して、留学したい、という思いは再び強くなった。現地で生活し、学び、交流することがどれほど豊かな経験をもたらすかを肌で感じ、「いつか」ではなく「必ず」留学したいという決意に変わった。私は HSK5 級を大学二年生の冬に取得し、語学力には少しだけ自信があった。実際に中国を訪れた時に街やお店の至る所に書かれている中国語を読むことはできた。しかし実際に現地の人と中国語で会話を試みた際、思ったように話すことができず、読み書きができることと話すことができることは全く異なることなのだ気づかされた。そして中国語を話せるようになるためには、中国に留学し、現地に住みながら現地の人々と交流することが一番の近道であると確信した。

中国に対するイメージは人それぞれであり、否定的な意見があるのも事実だ。けれども、だからこそ私は自分の体験を言葉にして伝えていきたい。一面的な報道や噂だけで国を判断するのではなく、実際に見て、聞いて、感じたことを通して、本当の理解が生まれるのだと、今回の訪中を通じて学んだからだ。そして言葉と文化の架け橋として、日中のより良い関係づくりに貢献できるような人材を将来は目指していきたいと思うようになった。

そして今回の訪中団に参加させて頂き、携わってくださった全ての方々に感謝を伝えたいです。私の、中国に留学して現地で中国語を、そして中国の文化を学びたい、という気持ちを再認識するきっかけとなりました。私の人生において訪中団に参加した一週間とは、言葉では言い表せないほど価値のある体験となりました。大学では外国語系の学群に所属し、学群内のほとんどの学生が英語を専攻する中で、少数派の中国語を専攻してよかったと心から思い、そして誇りに思います。これからも中国語の学習に励み、そして留学という夢を叶えたいと強く思います。狭き門だとは思いますが、現在は日本中国友好協会の公

費留学生を目標にし、ますます勉学に励んでいきたいと思います。貴重な体験と時間を、そして人生において宝物となる友人たちと出会わせていただき深く感謝申し上げます。

“近くて遠い国”への一步 ― 五感で体験した中国

3-B 徳島大学 山田菜月

今回私は、2025 日中友好大学生訪中団第 2 陣の一員として、7 月 24 日から 30 日まで河北省と北京市を訪問する貴重な機会をいただいた。初めての中国訪問ということもあり、すべてが新鮮だった。この 1 週間の訪中では、天候の影響や思いがけないトラブルにより、予定していたスケジュールの変更を余儀なくされる場面もあったが、それも含めて非常に意義深く、忘れられない体験となった。

訪中前の私の中国に対する印象は、特に良くも悪くもない曖昧なものだった。文化的には深く関わりがあるはずなのに、互いにどこか距離を感じているようなイメージを持っていた。また、中国人に対しても、大人数でにぎやかに話すイメージが強く、実際の姿をよく知らなかった。

しかし、実際に訪れてみると、その広さや多様性に圧倒され、一言で「中国はこうだ」と言うことの難しさを実感した。今回の移動は全てバスで、直接接した中国人は関係者やガイド、施設スタッフの方々が中心だったが、彼らとのやりとりから私の印象は大きく変わった。勇気を出して「謝謝」と言うと毎回のように「不客气」と返してくれるその温かさに心を打たれた。日本では「ありがとう」への返答が人それぞれであることを思うと、このような応答の文化が印象的だった。

また、この 1 週間は観光では得られない特別な体験の連続だった。中でも、北京大学で開催された「世界青年平和大会」への参加は特に印象深い。世界中の学生が集まり、習近平主席のメッセージも紹介されるような大規模な場に日本代表の一人として参加できたことは、忘れられない経験である。日本ではあまり耳にしない国々の代表がスピーチをしていたことから、国際社会における視点の違いも学ぶことができた。衛生面や水質、大気汚染についても不安があったが、実際は体調も肌の調子も良く、トイレなども想像していたよりは整っていて、中国に対するイメージは前向きに変わった。一方で、言葉の壁は想像以上に大きく、英語はほとんど通じず、中国語で話しかけられても理解できないもどかしさを強く感じた。だからこそ、語学の重要性を改めて痛感した。

今回のような国が支援するプログラムだからこそ、安心して中国を訪れ、現地の人と交流することができたと思う。この経験は、私にとって中国への理解を深めるきっかけとして非常に意義のあるものだった。また、このようなプログラムを今後も継続的かつ積極的に進めていくことは、日中の友好関係をより良いものにするための大きな一歩であり、重要な取り組みだと感じた。自分自身もこの体験を通して中国に対する興味が一層深まり、今後は日々のニュースや歴史的な視点にも目を向け、中国語の習得にも挑戦し、さらに成長した姿で再び中国を訪れたいと強く思う。

見てみないとわからない。けれど、たとえ見たとしても、全てを理解することはできない。」——これが、今回の訪中を通して私が最も強く実感したことだった。事前にどれだけ資料を読んでも、人から話を聞いても、実際に自分の目で見て、空気を感じてみなければ

分からないことがたくさんある。だが同時に、実際に見たからといって、それだけで相手の社会や文化、考え方を完全に理解できるわけではないことにも気づかされた。だからこそ、人は常に学び続ける必要があるのだと思う。今回の訪中は、中国という「近くて遠い国」に自分の足で一步踏み込むことで、自分の中に新たな視点や気づきが生まれ、深い学びへとつながる貴重な機会となった。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださったすべての関係者の皆様、さまざまなスケジュールの変更や目まぐるしく変わる日程の中で最善を尽くして支えてくださった現地の皆様、そして互いに励まし合いながら充実した時間を共に過ごした仲間たちに、心より感謝申し上げたい。

「言語を通して異文化を知り、自文化を見つめ直す」

3-B 琉球大学 芳山ころ

このたび、大学生訪中プログラムに参加し、河北省と北京市において多くの施設や教育機関、文化施設を訪問し、現地の人々と交流する貴重な機会を得た。大学では第二言語として中国語を学んでおり、沖縄という中国人観光客が多く訪れる土地で育ったこと、そして中国ドラマを通じて中国語や社会に親しみを感じていた。そうした背景をもって訪中に臨んだが、実際の現地での経験は、自分の持っていた中国へのイメージをより深めるとともに、新たな視点を与えてくれた。

印象深かった体験の1つは、河北省のシルクロード国際文化交流センターで鑑賞した『紅樓夢』の舞台である。観客の四方を囲むように設計された舞台に、光と音の演出が巧みに加えられたその空間は、まるで物語の世界に入り込んだような臨場感に満ちていた。芸術性の高さに圧倒される一方で、セリフの中国語は非常に難解であり、自分の語学力の未熟さを痛感する場面もあった。しかし同時に、「もっと中国語を理解できるようになって、いつかもう一度この舞台を観たい」と素直に思える強い動機づけにもなった。

語学に関して特に印象に残っているのが、北京外国語大学の学生との交流である。彼らの日本語は非常に流暢で、日本文化への関心も高かった。また、日本語専攻の建物内には、文学・歴史・社会など幅広い分野の資料がそろった図書館があり、学生たちが深い学びを重ねている様子がうかがえた。その姿勢からは、語学を単なるツールではなく、異文化理解の手段として真剣に学んでいることが伝わってきた。

また、中国共産党歴史展覧館を訪問した際には、展示の豊富さや内容の深さに圧倒された。そして何よりも印象的だったのは、多くの中国の人々が真剣な表情で展示を見つめ、熱心に学んでいる姿である。若い世代から高齢の方まで、自国の歴史を自らの足で確かめようとする姿勢に強い敬意を覚えた。ふと「自分は日本の歴史についてこれほど真剣に学んだことがあったのだろうか」と問い直すこととなった。国際的な交流の場においては、自国の過去や社会を正しく理解し、語る力を持つことが不可欠であると改めて実感した。

さらに、北京大学で開催された世界青年平和大会では、様々な国の若者たちが自国の文化を紹介するパフォーマンスやスピーチを披露していた。その姿はどれも誇りに満ち、自信にあふれていた。私は、「もし自分がここで日本、あるいは沖縄を代表として何かを語るとしたら、どんな言葉を選ぶのだろう」と自分自身に問いかけた。普段はあまり意識することのない問いだったが、自分が暮らす土地や国について、もっと深く知っておく必要があると痛感した。

今回の訪中では、どの施設においても日本語通訳の方が同行してくださったため、内容を理解する上で大きな助けとなった。しかし、その一方で、「現地の言葉で理解できたなら、もっとその土地の人々の想いや空気を感じ取れるのではないか」と感じる場面も多かった。言語を通して文化や価値観を理解する力を身につけたいという気持ちは、これまでに以上に強くなった。

私は今後、沖縄で観光業に携わることが決まっている。今回の訪中団で得た「語学力の重要性」「自国への理解」「異文化への敬意」といった学びを、観光という場において活かしていきたい。沖縄は多くの中国人観光客が訪れる土地であり、そこには言語だけでなく文化の相互理解を深めるチャンスが数多く存在している。観光を通じた日中間の交流や相互理解、さらには信頼関係の構築に少しでも貢献できるよう、今後も学びを続けていきたいと考えている。